

---

# 悪魔探し

誓約者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔探し

### 【Nコード】

N69880

### 【作者名】

誓約者

### 【あらすじ】

大人しいほうに分類されるであろう流浪春安は突如、『悪魔探し』と呼ばれるゲームに参加させられた。ルールはたった一つ。悪魔とされた同級生を殺すこと。殺さなければ殺されてしまう状況下で春安は誰も殺さないことを誓う。誰が生き残り、なぜ殺さなければならぬか。すこし重たいサスペンスになっています。

## ゲーム開始

僕らは不条理な自習を受けていた。

かれこれ自習がはじまってから、少なくとも二時間は経過していた。

「…」

何度目になるか分からないため息をつく。

偶然にも窓際だった僕は、次々と下校する生徒の背中を眺めるばかりだ。帰れない僕らにとってはちよつとした嫌がらせだ。

ほとんどの生徒は自習の課題もすでに終わっており、教室の中は一種の無法空間となっていた。

もともと学校の風潮として地元の中学校からエスカレーター式で上がってきている生徒がほとんどのため、受験勉強を経験して来なかった馬鹿ばかりである。

あちこちで奇声を上げ、ペンなどの小物が飛ぶのは当たり前。自分の席に座っているなんてありえない。

多くは暇をもてあまし、自分が話しやすい人間とくだらない時間をつぶしている。

ただ、僕は なにかはるやす 流浪春安はそんなくだらない人間ではない。

この荒れた高校の中では良識あるほうの生徒だと思う。比較対照が悪すぎるためどこまで正確な情報かは推測できないが。

「なあ、いつまであの馬鹿は俺らをまたせるんだよ〜！」

教室の最前列、右端に位置する一番の馬鹿、先鋒智樹なまきちきが喚いている。教養を受けた痕跡すら見当たらない生徒。空気は読めずに好き放題

うるさくする。付け加え問題を起こした場合は直ぐに責任転嫁する。多分あの馬鹿とは担任のふくよかな先生のことだろう。

とはいっても担任は馬鹿なのではない。いつも智樹がHRの間うるさくして、その注意に時間を割かれてしまいその結果HRが伸びてしまふのだ。

それを担任の責任だと思っているのだ。なぜ自分のせいだと気付かないのだろう。

春安の中で結論は速決した。智樹は馬鹿だからか。

「さっさと帰らせるよな〜！」

馬鹿が取り巻きの馬鹿どもに同調を促す。こんなことを同級生が思ってるなど知る由もないだろう。ばかなのだから。

とは言え今日の自習時間は妙だ。二時間という時間に加え、監視をふくめて先生が一度たりとも来ていないのは不自然だ。

「俺はよおー……」

雑音が自分を自慢しようとする。薄っぺらな言葉はもう聞きたくない。無言で春安は自分の耳を塞いだ。

その時だった。二、三度の甲高い電子音が学校のスピーカーから聞こえてきた。

『一年三組の皆さん……』

聞いたことがない女性の声は春安が位置する教室を呼んだ。

クラスの少数も耳を傾け、騒音は尻すばみのように消えていった。

『大変長らくお待たせいたしました。これより悪魔探しを開始致します。』

短絡的に自己紹介をするかのごとく、その声ははっきりと述べた。悪魔探し？伝記や空想話で出てくる悪魔のことだろうか。

『ルールはいたって簡単です…』  
春安は手の動きを止めて小さく頬杖をついた。

『この中で悪魔と認定された生徒を殺してください』

「…」

えーと…？

あまりにも唐突な宣言に春安はきよとんとする。

「ふざけんなー！さっさと俺らを帰せ！」

智樹の言葉に取り巻きが、そうだそうだ、と歓声を上げる。

『その生徒は内面も外見も普段と何も変わっておりません。よって悪魔を見分けるすべなどなく、手当たり次第に殺しあうしか方法がありません』

構わず冷たい声は説明を続ける。

『殺しあう道具はそれぞれの性格にあわせたものを各生徒に配布済みです』

「シカトかよ」

智樹はスピーカー越しに会話できると思っているらしい。やはり馬鹿だ。

ともかく現実のように現実離れた言葉がつながれ、少なからずクラスのどよめきが聞こえる。

『またこのゲームは強制参加となっており、校内から出ようとした者は容赦なく射殺します』

声色が楽しげなものへと変わる。

『それでは。健闘を祈ります』

そう一言残して校内放送の電源が切られた。

静まり返る教室の中。呆然とする者。苦笑いを浮かべる者。奇妙にも騒ぐ者は居なかった。

重い沈黙。意外にも馬鹿が打ち壊した。

「…ばつかばかしい！」

小さく机を小突き机のフックに掛けられていた自分の学生鞆を手に取った。

「どこ行くんだよ？」

「どこ？家に帰るんだよ。文句あんのか？」

不機嫌そうに馴れ合っていた取り巻きにはき捨てる。

「でも今、出たら射殺だって……」

馬鹿の友達が食い下がる。だがその一言に智樹の眉はさらに寄った。

「……ばかか？あんなの信じてんのか？」

智樹は罵倒ぎみに言う。

「本当だって言ったか？悪戯に決まってるだろっが」

「でも……」

「じゃあ馬鹿は勝手にしろ。俺は帰らせてもらっ」

言うだけ言って智樹は啞然とする教室の空気を背に受け、ここからから出て行つた。

扉が雑な音を立てると誰かがこう言った。

「あいつの言う通りかも知れない……」

この一言を起源をとし、教室の空気はがらりと変わった。殺伐とした重く苦しい空気から、樂觀視した穏やかな空気に。

小さな声で話しているが集合した大声で現在の状況を把握しきれないうるささ。

いつもの喧騒が呼び戻ってくる。

誰も本気になどしていない。きつとこれは冗談なのだ。

春安も安堵の面持ちで学生鞆を手にする。

「……春安、だっけか」

若い声は背後から掛けられた。

振り向くと自分とは全く縁がない少年が立っていた。

「……えつと……」

縁なさから名前すらすつと出てこない。

少年は困ったように眉をひそめ苦笑いをした。

「下萩丞しもはぎのむねだよ。名簿は六番」

「あゝ……」  
完璧に思い出した。いつも休み時間や授業中に一人でいる生徒だ。運動神経はそこそこ高く、勉強も出来ると言っていていいレベルの生徒だった。

しかし自ら近寄りがたい雰囲気醸し出し、どこの派閥にも属さずぼつんといる少年だ。

そんな内向的な丞が何の用だろうか？

「これから帰る？」

女子特有のふんわりとした口調。普段の丞からはまったく想像できないほど明るかった。

「ま……そうなるな」

目をあらぬ方向に向け適当な返しをする。

推測よりは話しやすい生徒なのかも知れない。

「その前に来てもらいたい所があるんだ」

不意に丞が春安の手を握りどこかへ走り出した。

「ちょ……」

「いいから……ちょっと屋上に来てほしいだけだよ」

子供のように無邪気な声であいまいな理由を説明する。断る理由もなく、丞と春安の制服は揺れながら階段を幾度となく足がもつれそうになる。

「……ついたよ」

立ち止まると丞は静かに屋上のドアを開いた。

「？」

何の変哲もない。

空を見上げても教室から見たようにうるこ雲が夕焼けに燃やされている。屋上自体も整然としており、ごみ一つ落ちていない。

がらんとした空間に同級生が三人、思い思いの体勢でこちらを見ている。

「あゝ、と自己紹介は後でいいから……。みんな校門に注目！」

「……」

誰もが面倒そうに転落防止用の柵に寄りかかる。

ゆっくりと校門を見下ろす彼。おどおどして小動物のように恐る恐る覗く彼女。それを保護者のように見守るもう一人の彼女。

そして丞、春安と並んでいた。

丞が指差す先には智樹の姿があった。何の変哲も…。いや元が変の場合はどう表現すればいいのだろう。

「普通、だよ…」

小動物な女子生徒が言った。

その通り普段の智樹だ。丞は何も言わず、にこにこ智樹を見ている。

「？」

突然校門をくぐったところで智樹の足がぴたりと止まった。直後、体は支えを失ったかのように無造作に倒れた。

何が起こっている…。

不可思議に思想をめぐらせはじめ春安。

倒れた智樹の体からなにか染み出している。黒っぽい液体がコンクリートの地面に広がっている。

粘性を持った何かは、春安の思考回路のある一点を連想させた。

「血…？」

奥歯ががちがちと震えだす。

「きゃあああああああ！」

「うわああああああ！」

「…！」

「…まさか…」

「あ…あ…」

目前の悲惨な光景を目にし、それぞれが表情を強張らせる。

それまで風が吹く音すら聞こえなかった屋上は悲鳴と嗚咽する声に満ち溢れた。

血はまだ垂れ流され、染み出して広がっている。

たった一人を除き、皆が戦慄した。



「残念…」

丞は血が流れる光景をみて、笑っていた。

「このゲーム…本物みたいだね」

本当に冷静に丞は笑った。

## ゲーム開始（後書き）

ふう…やっと出来た。  
読んでいただき光栄です。

学校 通っている高校のイメージ。

取り巻き いわいる下っ端。一番嫌いな立場のため名前なし。

女性の声 不明。

悪魔探し 思いつき。

屋上 これから舞台となる場所の一つ。

屋上の三人 レギュラーキャラクター。名前は次回。

流浪春安 るいはるやす 大人しめの少年。筆者の理想。

下萩丞 しもはぎすずむ つかみ所のない不思議君。筆者お気に入り。

先鋒智樹 ひさきでともき 役目終了。死亡

## 嘲笑

なにが起きたんだ。

春安の焦点がある一点から動かなくなる。

倒れたまま動かない人。染み出した黒い液体。駐車場の隣で汚し

続ける。

どろりとゆっくりと確実に広がっていく。

「…あゝ、軽率な行動するからだよ」

隣の下萩丞の言葉に、春安の意識が体に帰る。

「……丞。なんだよこれは！」

唸り声に似た問いが口から発せられた。

丞は見透かすように目を細め、目を合わせた。

「多分、ゲームのルール違反じゃない？」

「…ゲーム……」

全く錯乱せずに返答を返す。

何を思ったか春安は襟を持ち上げる。

「知ってたのか！」

次いで怒りが言葉になった。

丞は苦しそうにじたばたと足を前後に暴れさせる。

「ち、違う…俺も今日初めて知ったよ……」

必死に弁解するが春安は手を離す様子がない。

「…おい…春。嘘はついてないみたいだぞ」

後ろにもう一人いた男子生徒・門石栄一郎かどしいえいちろうが言う。

彼は多分クラスの中で嫌われている。勉強の成績もそこそこ高く、春安よりも順位が高い時もある。

だが性格に問題があり他人の気分を度外視した話し方でうざがられることが多い。

趣味で完成しかけているゲーム脳もこれほど衝撃的な光景を見るとまったく機能しなかつたみたいだ。

「……」

「……いたっ！」

乱雑に丞の体を投げ捨てる。

「なら、なんでそんな冷静でいられるんだ？」

怪訝な目つきで春安は唸る。

叩きつけられた背中を痛がりながら、つたない口調で話す。

「僕はただあの放送が真実だった場合と嘘っぱちだった場合を想定していただけだよ」

自然に言っているが、狂っていると直感する。

死が関係した話を正面から受け止めるなどこの国では正気の沙汰ではない。平和ボケのせいであり、戦争を経験している年齢ではないからだ。

丞は何かが狂っていた。

「……で、答えは真実だった」

丞は言う。

すると後ろからしていた嗚咽が急に止まった。

「……智樹くんをほっといたのはそれを知るため……？」

振り返れば嗚咽していた気弱な女子生徒 金切皐月かなきり さつきが怯えた表情で丞を見ていた。

彼女はとてもおとなしい生徒だ。一日のうちに話す機会が右手で足りるくらいだ。

おっくうで引っ込み思案で消極的で、とりあえず友達は一人ぐらいしかないようだ。

ここまで内気だとクラスの中での存在意義はほとんど皆無だ。

そんな彼女の問いに丞は一瞬のうちに冷たい目をした。

「だね。検証は必要だから」

「！！」

丞の言葉に皐月の表情が凍りつく。

「…あんだ、最低だね」

再び嗚咽し始めた皐月の顔を自らの胸につずめるもう一人の女子生徒が言う。

彼女は糸魚川<sup>いとがわ</sup>怜<sup>れい</sup>。皐月の唯一の友達だ。

怜はさばさばとした性格でとても人気がある生徒だ。特に後輩の女子からの支持はファンクラブまで作成されるほどに達していた。

皐月の保護者的存在で彼女を傷つける人間には容赦なく牙をむく。

「最低？自己防衛の手段だよ？」

怜の剣呑とした視線を気にせずには丞は卑しげに笑った。

殴りたくなる拳を春安はこらえる。

「……」

「ま、ふつーなら落ち着く時間も必要だね……」

辺りを見渡して丞はこう言った。

動揺を隠せない栄一郎。

嗚咽を繰り返す皐月。

優しい目で皐月を抱える怜。

そして、怒りの宛先が見つからない春安。

「その間、僕はゲームに必要なものを集めてくるよ」

場に合わせ元気な声で、丞は校舎の中へと入っていった。

ばたん、と扉の閉まる音が大きく聞こえた。

「……」

暗鬱な空気の中、誰も何も言おうとはしなかった。皐月と怜は死体の見えない反対側の隅に移動し、栄一郎は困ったような拳動をして彼女らと対の隅に腰を下ろした。

ただ一人立ちすくむ春安。

「…栄一郎」

「？」

不意に呼ばれた栄一郎は驚いたようにこちらを見た。

「ゲームのルールを覚えているか？」

「……なに……言ってるんだ……？」

「……確か、悪魔に定められた人間を殺せばゲームは終わるんだよな」  
不穏な言葉が口から告げられる。

「ならさ。あいつがなぜ俺らをここに集めたんだ？あんなに冷静なら集める前に殺しておくべきだろ」

怪訝な口調でおかしなことを言っていると自分でもわかる。けど、引つかかったのだ。

交錯する思考の数々。

現実味がある仮定は問われた栄一郎が口にした。

「……このゲームはチーム戦だから……？」

「……どうということだ？」

「サバイバルで生き残る攻略法の一つにチームを組む場合がある」  
栄一郎の説明はこうだった。

まず自分より弱いキャラクターを仲間にする。すると個人対複数の図式で戦える。自分が死ぬ確率は減り勝利する確率が数段に上がる。

最後に自分のチーム以外の人間がいなくなったらチームの皆を殺す。

「ただ欠点が二つある」

指を二本立て、指折りながら説明する。

「相手が自分と同じ戦略でこちらよりも戦力が強かった場合。当然負けるのは判るよな？」

「ああ」

「もう一つはそれを恐れて人数を増やした時。増やしすぎれば、内部分裂が起こる。戦力は大幅に減り、混乱中に殺されるかもしれない」

納得できる論だった。

春安は口元に指を当て考える素振りをする。

「……あんたら戦うつもり？」

二人の様子を見ていた怜が不思議そうに問いかける。

「おれは…こいつに聞かれたから……」

やはり度胸のない答えを返す栄一郎。この場の誰もが戦いたくなかった。

そしてこの『悪魔探し』というゲームを心底うらんでいた。

「…怜はどうなんだ？」

春安は聞き返す。

「私は別に構わないよ。この子を守るためなら誰でも敵になる。この子は戦わせないけどね」

「…すうー……」

いつの間にか臯月は眠りに落ちていた。泣き疲れたらしく怜のひざの上で穏やかな寝息を立てている。

「本人が戦いたいと言ってもか？」

「そんな子じゃないのは私のほうがわかってるつもりだけど」

とげとげしく怜は春安の言葉を返す。

「栄一郎の考えだと最後の方には生き残れるんだな」

「…まあな」

得意げに笑う。

「丞が何を考えてるかわからない。だがこの人数をそろえたんだ。せいぜい利用させてもらおう」

\*

校舎B棟。廊下。

特別教室が多い棟で丞は両手いっぱい毛布と食料が入っていると思われるビニール袋を手に使っていた。

完全に自分たちのクラス以外の人間は排除されている。容易に職員室から鍵を盗み、毛布は被服室から、食料は調理室と職員室の冷蔵庫から盗み出していた。

「えーと……」

がさこそと音を立て、ビニール袋の中の食料を確かめる。  
約三日分は楽に過ごせる分量はある。

「ん？」

B棟とA棟をつなぐ渡り廊下から校舎裏から校庭に向かう人影を見る。

とりあえず丞はそれを見る。

案の定、学校の敷地内から出た途端、体は力なく倒れこんだ。人目に付かないところなら大丈夫だと思ったのだろう。

「…わからんでもないけど」

丞は死体を嘲笑して、何もなかったように再び歩を進める。

すれ違ふはクラスメイトのみ。どれも暗い顔で、未だにゲームを理解して割り切ってる者など特に見受けられなかった。

階段へと差し掛かり、丞は毛布とビニール袋を持ち直す。

靴裏が床を擦る音が重苦しい校舎の中に響き渡る。



## 嘲笑（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

門石栄一郎 かどしいえいいちろう ゲーマー。

糸魚川怜 いといがわれい 皐月の保護者。

金切皐月 かなぎりなつき 泣き虫。優しい心

下萩丞 しもはぎすずむ 性格は作者に似てるかも

流浪春安 るいりゅうはるやす なんだかんだいって戦うことは既に決意してる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6988o/>

---

悪魔探し

2011年1月27日14時58分発行